

とても無理だときとされ、やむをえずおもがわさわ面川沢へひき返しました。

「母上やお家の方々も、かならずここに来るはずですから。」

と留吉とめきちになぐさめられて帰ってはみましたが、逃げてきた人たちが家の内外にあふれている中に、いくらさがしても母たちの姿は見あたりません。

「お家の方々は、後からかならず見えますから。」

となぐさめの言葉をかけてくれる人もあって、昼食をとる気もなく、戸口にたたずんで、ひたすら避難ひなんしてくる人々の中に母や家族の姿をさがし求めていました。

五郎が、どんなに待っても来るはずのない母たちのことを知ったのは、その日の夕方近くのことでした。

午後三時ごろ、面川村に住んでいる柴清助しばせいすけおじが、ひどくつかれた様子でやって来ました。